慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フリウリ地方の水妖アガーナ : 民間伝承と宗教
Sub Title	Agane nel Friuli storico : religione e tradizioni popolari
Author	片木, 智年(Katagi, Tomotoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.2 (2021. 12) ,p.33- 46
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	荻野安奈教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210002-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フリウリ地方の水妖アガーナ：民間伝承と宗教

片木　智年

筆者は「水妖」について、いくつかの場所で考察してきたが、本稿ではイタリア北東部フリウリ地方に伝わるアガーナaganaと呼ばれる妖怪の伝承について、取り扱うこととする（イタリア共通語ではむしろ「アングアーナanguana」である）。このフリウリのアガーナについては、地理的に大変限定された形で、さまざまな民俗資料が残されており、またそれを網羅的に整理しようとした仕事も残されている。それゆえ、いままで筆者が提示してきた見解について、具体的な検証の場となるのではないかと考える。

最初に興味を惹かれるのは、アガーナと呼ばれるものの多面性である。女性とされ、人外のものということは共通なようだが、そのとりうる姿や役割はさまざまである。「大変美しかったり、化け物のようであったり、若くもあれば、老女のこともある。魔女であったり、良き配偶者であったり、幸いをもたらしたり、不幸をもたらしたりする。ガヤガヤとうるさかったり、美しい旋律で歌ったり、剝奪者であったり、授けものをしたり、人間を食らうこともあれば、赤子の世話を完ぺきにこなすこともある[1]」とされる。そして同じフリウリ地方でも場所によって「毛むくじゃらの老女（…）若く美しい人魚[2]」だったりと、その姿も大きく揺らいでいるのである。

とはいえ、この多様性を、「アガーナ」本来の多様性に起因すると考えると袋小路に陥ってしまう。むしろ、さまざまな歴史的ルーツや意味を持ち、別個の存在として考えられてきた妖怪（それら自身も混淆の結果であろう）を、「アガーナ」と呼んでしまったためと考えたほうが良いだろう。呼称の問題でもあるのだ。このアガーナを巡る語彙の単純化は、例えばイタリア共通語で言う「オ

ルカ」（直訳すると女鬼）や「ファータ」（妖精・妖女）といった、今日あまりに広範囲に使われる語彙の使用にも伺える。これはフランス語でも同様である。語源的にもイタリア語と同じ「オグレス」（女鬼）や「フェー」（妖精・妖女）が、地方にはまだ残る多種・多様な属性と名前を持った不思議な存在を抱合し、指し示すために使われるようになったのである。土俗の神々を迷信化し単純化していったキリスト教の、民衆レベルでの浸透が作り出した語彙の変化であろう。同時にフランスでは、民間伝承から話を汲み上げながらも、民間伝承の不思議な存在や現象を単純化するのにおおいに貢献した１７世紀末の「おとぎ話」作者たち、そしておとぎ話ブームそのものの影響も大きい。これについては、イタリアでもほぼ同等のことが起こったと考えられ、対抗宗教改革で人心の引き締めをはかったカトリックの影響に加え、ストラパローラやバジーレなど、１６～１７世紀にかけて民間伝承から、題材をすくい上げて物語った作家とその書承の伝統によるところも大きいだろう。土着の古い神々、といったが、それらに対する信仰の向かう先は東西のさまざまな伝承を通して、主たるものは共通であると言ってもよい。アガーナにまつわる入り組んだ糸をほぐすために、本稿で注目したいのは次のようなものである。

１）まず、命の根源である水に対するもの。これはアガーナがなべて水の妖精・妖女と認識されていることから、おそらく本流的なものであろう。

２）出産をめぐるもの。もっと広く言って誕生・命をめぐるもの。

３）死や死者に対するもの。なかでも家の祖霊。

主として、以上の三つの系統の土俗的モチーフが混淆し、実に広範なアガーナの表象を作り出しているようなのである。

＊
＊　＊

それではフリウリ地方のアガーナを巡る伝説に具体的に触れていこう。ここではフリウリ地方の伝説を集めた膨大な資料集『歴史的フリウリにおける神話、民

話、伝説』[3]から引いておく。最初にとりあげるのは「ガチョウの足をした妖精」と名付けられた短い話[4]で、以下は全訳である。

> ひところのお百姓は夜中の１時、２時に起きて仕事に行ったものだった。例えば、わたしたちの家の先祖の百姓は、今では火薬工場になっているところに、牧草地を１６枚持っていた。そこに足で通っていたが、３時間もかかる道のりだった。あるとき家の若者が踊りに行って、夜遅く帰ってくると、家族はみな仕事に出た後だった。父親に叱責されるのを恐れ、急いで着替えると、鎌を手にして、深夜に歩き始めた。しばらく歩いて、近隣の里を通り抜けた。ソレスキアーノだと思う。そこの広場で人々が踊っているのを目にした。が、奇妙なことに踊っているのは若い娘だけだったのだ。美しい娘たちで、皆白い服を来ていた。「なんだって、これは運がいいな」。壁に鎌を立て掛けて、男は一緒に踊り始めた。半時間も踊った後、偶然、足元の方を見ると、娘たちは皆、水の妖精なのだと気づいた。皆、ガチョウの足をしていたのだ。若者は突然の恐怖に、死んだようになった。こんなことはトレントで公会議が開かれる以前にはよくあったことだが、今ではもうそんなこともなくなった。CAMINETTO

娘たちはアガーナ、水の妖精だとされているが、若者がそれに気づいた理由は、ガチョウの足をしていたからだとされる。他のさまざまな伝承でアガーナがまとう魚類や蛇の下半身、あるいはサンショウウオの姿などと比べると、水とのつながりが日本人にはあまり直感的ではないが、水掻きで進むガチョウやカモの隊列を思い浮かべれば（ガチョウはカモと同じカモ目カモ科）、納得のいく民俗的発想である。白い服もまた、西洋で語られる多くの水妖の特徴である（後述するように、この白い服は死者がまとう経帷子とも通じる）。くわえて、ここでは、ガチョウの白い羽毛との類推もあるのだろう。ところでこの資料では、イタリア語とフリウリ方言の双方が併記されており、フリウリ方言では、はっきり「アガーナ」（agana『単数』, aganis『複数』）という言葉が使われている。にもかかわらず、編者達によるイタリア語版では妖精・妖女を指すfata（単数）fate（複数）という一般的な言葉が「アガーナ」に充てられている。この著作を編纂した研究者たちは、「アガーナ」が（水の）「妖精・妖女」という現代のイタリア

人にとってより馴染みのある一般的なものに相当すると考え、それゆえfataという言葉で翻訳することを選んだのである。

さて、もう一つこの伝説で興味深いのは、トレント公会議の後にはこんな妖怪の姿を見ることは、さっぱりなくなってしまったと語り手が伝えている点である。トレントはフリウリからそれほど遠くない、やはり今日の東北イタリアにある街で（公会議当時はハプスブルク家領）、この数度に渡る会議についてはいろいろと地域の人々も伝え聞いたことだろう。宗教改革に対抗するために、欧州各地から高僧が何度も集まり、そこで改めてカトリックの教義が確かめられたことで、地域の人々の宗教的規範意識が強化されたと考えられる。当然、カトリックの教えとは相矛盾すると人々が重々承知の土俗の妖怪のたぐいは、これを機会に整理され、新たな見方を要求されることになる。トレント公会議に特化したこの問題については、後述することにしたい。とりあえずは、この問題をわきに置いたまま、他のアガーナに関する伝承を検討することになる。

まず、この地域でアガーナと人間の関わりあいについてどう考えられていたかだが、同じ資料の3を見るとよくわかる。ここでアガーナは

> 色々と悪さをする若い娘である。悪態をつくし、可愛そうな若者を恐怖に陥れる。しかし、魔女とは違う。魔女は人を呪ったり、動物を殺したりするが、この妖精は単に怖がらせるだけである。CAMINO[5]

とされている。

本来「魔女」は、キリスト教の教義に入っている「悪魔」と密接に結び付けられ、キリスト教に組み込まれた悪役であるが、アガーナはここでは「魔女」と歴然と区別されている[6]。いたずら者だが、本当に恐ろしい存在ではない。これもアガーナの、キリスト教以前から続く土俗的な信仰への所属を明らかにするものである（実は「魔女」と呼ばれるものにも曖昧なケースがあり、土俗的な妖女と混同されることもある）。同時に、二元論的なカトリックの善悪的価値観には組み込まれておらず、その外部に想定されているとわかる。

このあたりのことについては、語り手自体の解釈が加えられる次の資料の冒頭

部分が明白に語っている。

> お年寄りの話を聞いてわたしが理解した限りでは、妖精は頭が変で、自分たちの宗教を持っている。突然現れて、妊婦や、幼児、女の子をびっくりさせるが、魔女とはなんの関係もなく、誰も殺したりしない。水の流れの岸辺をさまよっており、中でもシロッコの吹く季節、１０月とか１１月によく動き回る。このあたりでも川にたくさんの水がある時期だ。ナティソーネ川やジュドリオ川でも……ひどい雷雨のときも水の妖精たちはあつまって、天気がよくなるまで、なにやら話し合っている。
> 道が小さな山道へと変わっていくような里の奥地でも目撃される。人に見られたくないためだったが、人里近くには留まろうとしていた。噂、なかでも女性についての噂に興味津々で、里の女性の中にはアガーナたちを死ぬほど嫌っているものもいた。女性たちはこんなことを言ったものだ。「私の娘を裏切ったのは彼女たちだ」「彼女たちがこれをやった」「彼女たちがあれをばらした」。
> 女性に大変興味を持ち、女性たちについてすべてを知りたがる。何人かは若く美しく、白い服を着ているが、普通は年老いて醜い。（……）
> アガーナたちと一緒に男の人が暮らしているというのは聞いたことがない。（……）ときどき妖女たちは話し合いをして、自分たちの知っていることの範囲で、村の女性を助けようと決めることもある。そういえばこんなことを聞いたことがある。美しい妖精たちはお産で亡くなったか、いずれにしても祝福を受ける前に亡くなった若い女性だと。ORSARIA[7]

「お年寄りの話を聞いてわたしが理解した限りでは、妖精は頭が変で、自分たちの宗教を持っている」。つまり、キリスト教とは異なった信仰を持つ奇妙な存在、理解を超えた存在だと説明され、「頭が変」だとまで言われてしまったのである。「魔女とはなんの関係もなく、誰も殺したりしない」とされていることについても先に述べたとおりである。

この資料でくわえて注目に値するのは「突然現れて、妊婦や、幼児、女の子をびっくりさせる」、「女性についての噂に興味津々で」、「女性に大変興味を持ち、彼女たちについてすべて知りたがる」という点である。アガーナは生命の源とし

ての女性に関わってくる存在で、同時に直接出産に関わる産婆や、子供を育て上げる乳母、男女間をとりもつ年配の女性など、現実社会の女性もそのイメージ形成に寄与しているようである。実際、ここでの妖女はイタリアの民話や、そこから話を汲み上げたバジーレなどにもよく現れる、好奇心満々で噂好き、しばしば若い恋人や不倫女性をピンチに陥れるステレオタイプ化した登場人物のイメージと照応している。民衆的風俗が摩訶不思議の世界の人物に投影されているのである。

また、この話者の特徴は、若く美しいアガーナと噂好きの老婆のアガーナを区別している点だ。「何人かは若く美しく、白い服を着ているが、普通は年老いて醜い」とされている。自分が聞いたのはむしろ老婆だとしているが、アガーナは白い衣装の若く美しい女だという別の伝承も受け入れている。そのうえで「そういえばこんなことを聞いたことがある。美しい妖精たちはお産で亡くなった若い女性か、もしくは祝福を受ける前に亡くなったものだと」いうのである。別系統の伝承がアガーナという呼称のもとで混淆したものと考えられるが、ここでは出産そのもののモチーフがより直接的にアガーナの表象に組み入れられている。伝統的に出産は母体にとって大きな危機であり、犠牲は多かったが、その死に方自体が、おそらく現世に遺恨を残すものだったという解釈だろう。こちらはわれわれ日本の伝承からもおおいに理解できる心性である。それが後に俗信的なカトリックの説明原理で「祝福を受ける前に亡くなった」ために贖いを強いられているという再解釈を受けたと思われる。以下の伝説がこの問題を正面から取り上げている。

> 子供が生まれたとき、40日の間、産婦は洗濯をしてはいけないと言われていた。40日の間、産婦はまた食べ物についても注意してもらっていた。いいものを食べていたのだ。例えば母親は子を生んだ娘のところに鶏や砂糖とカフェを持っていったものだ。産婦は40日が経つと祝福を受けるため、付き添われて教会に行った。その後はどこにでも自由に行くことができた。しかし、この期間に祝福を受けないまま、可愛そうにも死ぬようなことがあれば、姿を変えることになる……年寄から聞いたことがあるんだが……もちろん彼女らに課された罰だが、その魂が白い衣装をつけてコルノ川で何かを洗っているのが見られるという……まさしく水の妖精と呼ばれていた……

服を川ですすいでいるのが見られるのだ。つまり連中は祝福を受けられなかった魂で、それでこんなふうに川岸にやってくる。SAN GIOVANNI AL NATISONE[8]

この伝承では母親の苦業＝罰が語られているのだが、子はおそらく無事で洗礼も受けたのであろう。ならば母親にとって厳しすぎる贖罪にも思えるが、系統がもつれ合ってくる別のタイプの伝承を検討するとこのへんのことが、よく見えてくる。

水辺で何かを洗う元妊婦の亡霊は、実は「夜の洗濯女」と呼ばれ、西ヨーロッパ全域に伝わる別の妖怪として捉えられている。一般に白い衣装をつけ、多くは夜中に何かを洗っているのである。この伝承は隣国フランスを見ると鮮明で、有名なのは、ジョルジュ・サンドの『田園伝説集』におさめられた洗濯女である。次のように説明されているが、１９世紀中葉のフランス中部ベリー地方の話である。

満月の夜、ラ・フォン・ド・フォン[9]へと向かう道で、奇妙な洗濯女たちを目にすることがある。悪い母親の亡霊で、最後の審判の時まで、その犠牲者たちの死体と産着を洗い続けるように強いられているのだ。彼女たちは絶え間なく濡れた下着のようなものを叩き、絞っている。それは近くによって見てみるとほかでもない子供の死体なのだ。女たちはみな自分の子の死体を手にしている。罪が何度か繰り返された場合は何体かの死体である[10]。

いうまでもなく間引き・堕胎を問題としている（とはいえこの間引き行為も、貧困の中、しばしば社会的に黙認されたもの、やむを得ないものだったのであろう）。こうして母親たちは不気味な「洗濯女」という妖怪に姿を変えることを余儀なくされ「安らかに眠る」ことは許されない。最後の審判まで嬰児の死体を洗い続けるのである。

次に挙げるのはノルマンディーの伝説[11]であるが、先に挙げたフリウリの伝承と関連付けてみると、ひとびとの意識の多重性がもう少しはっきりとする。こちらの伝説では洗濯女たちは街の洗い場の周りに、夜になると現れ、夜明けに姿を

消す。老人たちに言わせれば「月明かりのもとで骸布を洗う女悪魔」（これは白い経帷子を洗う洗濯女のモチーフで、出産をめぐるものとは別系統である）とされてもいるが、「別の老人たちによると此岸に住んでいた頃に殺したわが子の手足を絞っている母親の亡霊」、「子供を洗礼を受けさせることなく死なせてしまった母親が、神の怒りが解かれるまで不思議な贖罪を強いられている」のだという。やはり出産をめぐる暗いモチーフが現れている。くわえてここでは、嬰児殺しという直接的犯罪行為に加えて、洗礼を受ける前に亡くなってしまった嬰児の運命という、キリスト教世界を悩ませた問題も想起されている（この問題に答えを見つけるため、教会側では「幼児の辺獄」というものを発明したのである）。ノルマンディーのケースでは嬰児殺しとその帰結である未受洗の赤子の問題がペアで提起されているいっぽう、サンドの例では、洗礼を受けずに死んだ嬰児の「辺獄」問題は提起されない。それを強いた母親の罪へとフォーカスが移動されているともみえるが、未受洗の赤子という問題自体が存在し得なかった時代に遡るともみえて興味深い。逆にフリウリの例では、母親の犯罪や未受洗のまま身罷った嬰児という刺激的なモチーフは避けられて、そのうえで、出産後まもなく亡くなった母親がなぜアガーナとならなければならなかったかが、出産をめぐる宗教的儀礼の大切さを教えるメッセージとともに、贖罪のモチーフを通して語られたのである。

なお、ノルマンディーの話では洗濯女たちは手に手をとって輪舞するとされていて、ここでもフリウリのアガーナたちをめぐるモチーフが見受けられることを付け加えておく。

＊
＊　＊

それではここで、最初に示唆しておいたトレント公会議の問題に立ち戻ろう。本論の最初に引用した話は、夜中に踊るアガーナたちとの不思議な遭遇についてだったが、その最後に「こんなことはトレントで公会議が開かれる以前にはよくあったことだが、今ではもうそんなこともなくなった」とされていた。つまり「昔はこんなことがあった」のだとして話の真正性を保証し、逆に語り手と聞き手の共有する「いま・ここ」の世界では起こり得ない理由を、トレント公会議と

いう出来事によって説明したのである。とはいえ、もちろんこの説明をそのまま真に受けるわけにはいかない。こういった類の不思議な事件は、トレント公会議前でも、現実に「起こる」ことはなかっただろうからだ。摩訶不思議な伝説の語りにおいては、常に二つの力が説明原理として働くことが想像できる。一つはそれが事実であるということを説得的に語るための力。もう一つはそれとは逆に、なぜ、こういったことが聞き手の生きる現実世界では起こったことがないのかを納得させるための力である。この後者の力のブースターとしてトレント公会議が都合よく使われたのだ。もちろんここで、カトリックの教義の浸透が、実際にこういった摩訶不思議な現象を否認したという正統的解釈を否定するつもりはない。ウンベルト・ラッファエッリは以下のように述べている。「民間伝承においては、トレント公会議はもっぱらキリスト教世界と異教の世界との間の分水嶺を象徴している。(……) したがって、その帰結の一つは様々な習俗、信仰、偶像崇拝、公会議自体で定められた厳格なカトリック的領域から逸脱する民間伝承の廃止であった[12]」。が、同時にラッファエッリはこうも言っている。「民間伝承はこれに適応した。さまざまな伝説が、公会議が悪魔や魔女を周りの土地から追い払い、離れて遠い谷間へと追いやったのだと語っている[13]」。

公会議は理論上の整理をしたが(ラッファエッリは象徴という言葉を使っている)、民衆にとっては会議自体が一種のお祓いの儀式、つまり事件的なものだと、解釈されたようである。キリスト教のパラダイム内の存在である「悪魔や魔女」、悪霊同様に、土俗的な神々も祓われ追いやられたが(それはおそらく、物理的・地理的な遠ざけにとどまらず、後述するようにノスタルジーに満ちた心の故郷への流謫でもある)、伝統的に語られてきたものの内容自体が否定されたわけではないのだ。

それでは、トレント公会議が語りの中で言及される例を二つほど紹介しよう。最初のものは文字通り祭司による悪霊祓いの話しとなっている。

> メレート・ディ・カピートロの農家でひどいことが起こっていた。13人家族だったが納屋で寝なければならなかった。というのも寝室には悪霊たちが住み着いて、大変な思いをさせられていたからだ。ベッドを持ち上げたり、足を引っ張ったり、要するにとてもいられる状態じゃなかった。(……) サンタ・マリーアの教区司祭を呼んだが、なにもできなかった。そこで、よく

知られていたパルマノーヴァの司教様に声をかけた。

この僧は到着すると家に入った。外の通りは、メレートの人々のみならず、よそからもやってきた人々で鈴なりだった。僧が叫ぶのが聞こえた。ついで恐ろしい声が響き、悪霊たちが狼のように吠え、喚くのが聞こえた。僧は悪霊を祓って、モンテ・カニン（訳注：現在の地図でスロバニアとの国境の山）へ送ろうとした。「イヤだ」悪霊たちが叫ぶ。「あそこは俺達の居場所ではない」。「いや、お前たちは行かねばならない。モンテ・カニンがお前たちの場所だ」。トレント公会議以降、地獄に落ちた人々や悪霊は皆この山に送られた。彼らは山上の洞穴に鎖で繋がれ、喚き散らさなければならなかった。可愛そうな大衆はこのやり取りを聞いて、たいへんな恐怖に駆られた。何時間かたった後、可愛そうな高僧は、僧衣まで汗でぐっしょりとなって降りてきた。疲れ切っていた。「わたしは自分の役割を果たした。私の義務だったからだ。わたしは人々を解放し、今や、悪霊たちは立ち去った。しかしわたしは死ぬことになるだろう」。一週間後にこの司教は亡くなった。MERETO DI CAPITOLO[14]

ここでは悪霊らの存在自体が否定されているわけではない。トレント公会議以降、そうなったように彼らも、里の人々の日常的暮らしから遠く離れたモンテ・カニンに封印されただけなのである。

次に挙げるのは語り手の祖父と父親に、それぞれ少年時代に起こった不思議な出来事である（やはり公会議が言及されている）。家畜に牧草を喰ます日常だった10歳の頃の祖父は、昼間、石の上に座っていた。すると大きな鍵を手にし、それを手渡そうとする不思議な女性に出会う。女は白い服を着ていた。祖父は怯えきって家に逃げ帰る。時が経ち、今度は語り手の父親が不思議なことに出会う。今度は自宅であった。

夜中の12時頃、父は階段を寝室の方へと登ってくる足音を耳にした。しかし特に気に留めることもなかった。何事もなく眠っていた。その頃は入り口の扉にすら鍵はかけていなかった。誰かが寝室の扉の前までやってきて、扉を開け、ベッドに近づいてきた。白い服を着た女だった。彼女はシーツをめくろうとしたが、父はシーツをしっかり摑んで、歯で噛み締めた。しばらくして彼女に叫んだ。あっちいけ。女がやめなかったので、父は噛んでいたシ

ーツを放し、罵り始めた。その時、やっと女は立ち去り、もはや姿を見せることはなかった。翌日、家族は父に尋ねた。「どうしたのかい。なぜそんな真っ青な顔をしてるんだ」。父はすべてを事細かに話した。恐怖を和らげるため、祖母がすぐにひまし油をくれた。今度も女は長い長い鍵を手にしていた。それはもしかすると、どこか知らないところに封印された、大金の入った宝箱の鍵かもしれなかった。それ以上のことは何もわからない。大昔のトレント公会議のせいでもある。PONTEBBA[15]

鍵を手にした白い服の女はアガーナかもしれないし、一家の祖先の一人かもしれない。またその双方でもありうるだろう。宗教的コンテクスト次第では、祖霊として、家の守り神として崇拝されたかもしれない存在が、恐怖と否認の対象となり遠ざかってしまったのである。そしてもはや姿を現すこともない。ここでの流謫は物理的な喪失に結びつく心理的な遠ざかりである。「大昔のトレント公会議のせいでもある」という語り手の結びの言葉はそういう意味で理解すべきであろう。

＊
＊　＊

本論の最後に美しい話を紹介し、短い結語をつけることにしよう。

「わたし」が７，８歳だった頃、おばあさんと呼んで慕っていた親類の女性がいた。

—何を見てるんだい？
—岩の下にあるあのくぼみ。マティーレ川の側の。
—ああ、あれはアガーナたちのクラプスだよ。
—クラプスって何？
—お前がさっき言ってたように岩の下のくぼみ、洞穴のことだよ。
—あのクラプスはとっても深いの？どこまで続いてるの？おばあさん、中に入ったことはないの？
—ない、でもあたしが小さかった頃、お年寄りが話してくれたよ。あの穴はレーシア側、モンテ・カニンの下まで続いていると。最近あそこに行った人

は、通り道の跡が見つからなかったようだけどね。おそらく入り口が崩落でふさがってしまったか、もう誰も跡を見分けられなくなったんだろうね。
—フェッラ川以外にも、あの上にもアガーナたちは住んでるの？
—もちろん、まだ中で暮らしていると思うよ。他の女性とは全然違った人たちだからね。
—ぜんぜん違うの？どうして？
—肌の色が真っ白で、純白の服を着ていて、髪の毛はトウモロコシの干した葉っぱのように明るい色、つやつやと長くて背中の下まであるんだよ。でも他の女性と違うのは足首から先が逆さまなところだね。
—逆さま？
—つまりつま先が後ろで、かかとが前ってこと。いつもは洞穴の中で暮らして、満月の輝く夜になると外に出てくるんだね。陽の光に当たっちゃいけないんだよ。さもなきゃ死んでしまうからね。
—おばあさんは見たことないの？
—うん。しばらく前から、誰も見かけなくなった。でもずっと前、まだわたしが子供だった頃、フェッラ川の岸辺で貧乏人たちのためにシーツを洗っているのを見かけたという人をたくさん知ってるよ。それからそれを自分たちのすみかの前に干していたんだとさ。
—穴から出ているあの砂利の上を通って、川まで降りていったの？
—彼女らにとってはとっても骨の折れる事だったろうね。逆さまになった足で歩くんだからね。あそこは傾斜がきついし、砂利道は彼女たちのお陰でできたものだよ。川まで降りていってシーツを洗って、あそこまで登って干して、というのを繰り返したからね。

その時からしばらくの間、わたしの頭の中に一つの考えが取り付いた。アガーナたちの「クラプス」へ行きたい、アガーナたちの世界へと続く、秘密の通路を探るのだと。ところが、障害が一つあった。フェッラ川だ。川を越えるには幼すぎた。でも、大きくなって、一人で川を渡ることができるようになったとき、アガーナたちは私の関心から消えてしまっていた。いまや「アガーナたちのクラプス」は茂みの中にほとんど完全に隠されていて、砂利道には草が茂っていた。それはもう長い間、とても長い間、アガーナたちが住処から出ていないという印だった。CASASOLA[16]

幼い頃、神秘と謎、興奮に満ち満ちていた世界が、人生の日々を重ねるうちに、いつの間にか色あせてしまう。この過程を美しく語った話だが、トレント公会議という民衆にとっての象徴的事件が果たした役割もそこと絡めて考えるべきかもしれない。仮に世界が魔術的な深みを失っても、それに対するノスタルジーと鮮やかな思い出は常に存在する。トレント公会議という出来事を口実にして、フリウリの人々は、かつての神秘を失ってしまった世界と、失われたものへ愛の双方を説明したのではないか。

註

1 Giosué Chiaradia, *Mitologia Popolare del Friuli Occidentale*, 7-Le Agane (parte prima), *Loggia* n.6, 2003 (http://propordenone.org/wp-content/uploads/2013/12/06_05.pdf) なお本論中の引用の訳文はすべて筆者による。

2 *Ibid*.

3 Istituto per la Ricerca e la Promozione della Civiltà Friulana «Achille Tellini» Manzano (Udine), *Miti, Fiabe e Leggende del Friuli Storico*, Chiandetti, 1997~2013. 全12巻　本稿での引用は、出版元の許可を得て掲載されている以下のサイトからである。https://www.natisone.it/0_store/furlanis/miti/miti00.htm 閲覧2021年8月14日

4 2. Le fate dalle zampe d'oca, https://www.natisone.it/0_store/furlanis/miti/cividat_1.htm 閲覧2021年8月14日

5 3. Le fate monelle, https://www.natisone.it/0_store/furlanis/miti/cividat_1.htm 閲覧2021年8月14日

6 「魔女は人を呪ったり」という表現が実は、フリウリ方言版でma-ludìvin i cristians「魔女はキリスト教徒を呪ったり」となっていることが注目に値する。「キリスト教徒」という言葉を「人、普通の人、まっとうな人」という一般的な意味で使い、魔女とキリスト教徒間の対立関係が示されているのである（ちなみにこれは、フランス語や英語にも見られる語法だが、それでは「キリスト教徒」でない「人」は何なんだということになり、今日では、完全に適切とは言い難い。イタリア語版でmaledivano le persone「人を呪ったり」としたのは意識的かもしれない）。

7 16. Le fate di Orsaria, https://www.natisone.it/0_store/furlanis/miti/cividat_1.htm 閲覧2021年8月14日

8 27. Le puerpere e le fate, https://www.natisone.it/0_store/furlanis/miti/cividat_1.htm 閲覧2021年8月14日　フリウリでは洗濯をするアガーナの表象は一般的で、この伝承は

例えば、以下の話に対する一種の説明となっている。「私の父が語ったところによると、夜中の12時頃に外出してナティソーネ川の砂利のほうに近づくものは水の妖精に遭遇する危険があった。白い肌着を着た女性で、2,3人のグループでしゃがみこんでいた。シーツを川の水で叩き洗いしていた。年寄りなのか若い女性なのかはわからなかった。というのも近寄っていくと消えてしまうのだから・・・夜陰の中に。ORSARIA」58. Le fate sul Natisone, https://www.natisone.it/0_store/furlanis/miti/cividat_1.htm 閲覧2021年8月14日

9 ベリー方言で「泉の泉」

10 George Sand, *Légendes rustiques*, Guéret, 1987, pp.31-36.　なお、洗濯女を始めとするフランスの水妖と日本の伝承については拙論“「洗濯女」から「ウブメ、オギャナキ」へ　―間引き伝説と水妖魔をめぐる雑考”『藝文研究』８９号、２００５を参照願いたい。この論考は筆者の『少女が知ってはいけないこと　神話とおとぎ話に描かれた＜女性＞の歴史』PHP研究所、２００８に再録されている。

11 *Récits et contes populaires de Normandie*, recueillis par Jean Cuisenier dans le Bocager, Gallimard, 1979, pp. 60-62.

12 Umberto Raffaelli, *Leggende, fiabe e figure immaginarie delle Dolomiti*, Editoriale Programma, 2019. p.62

13 *ibid*.

14 134. Gli spiriti malign a Mereto di Capitolo, https://www.natisone.it/0_store/furlanis/miti/acuilee_1.htm 閲覧2021年8月14日

15 118. La signora di bianco vestita, https://www.natisone.it/0_store/furlanis/miti/canal_1.htm 閲覧2021年8月14日

16 14. Le acquane, https://www.natisone.it/0_store/furlanis/miti/canal_1.htm 閲 覧2021年8月14日